

## リンゴ「ふじ」は生誕 80 年

### 果樹試験場

我が国のリンゴ主力品種「ふじ」は今年生誕80年を迎えました。

今やリンゴの代名詞でもある「ふじ」。日本はもちろん中国やアメリカ、欧州ほか海外でも栽培が広がり、現在は生産量世界一の品種になっていますが、その誕生から発展にはどんなドラマがあったのでしょうか。

#### ●「ふじ」の選抜 — 苦悩と歓喜 —

昭和13年に農水省園芸試験場東北支場が青森県藤崎町に設置され、育種が開始されました。当時の主力品種「国光」を超える優良品種の育成を目標に、翌14～16年にかけて64組み合わせの交配が行われ、13,775個体のリンゴ実生が得られました。このうち14年の「国光」×「デリシャス」の交配実生787個体の中の1本が後に「ふじ」と命名されることとなります。選抜に携わった研究者は実生の食味調査では酸味で口内が荒れ、味覚が朦朧となる苦行のようだったと後に語ったそうです。そしてついに昭和30年秋に、品質、貯蔵性が極めて優れる有望個体（後の「ふじ」）を探り当てます。

#### ●新品種「ふじ」の誕生

選抜された有望個体は昭和33年に系統名「東北7号」として地域適否性試験に供され、その有望性が高く評価されて36年に果樹としては異例の速さで命名登録出願が決定されます。翌年品種名の候補は「ふじ」（育成地の藤崎町のふじと富士山のふじをかけて）と「ラッキー」（「東北7号」がラッキーセブンに通じることから）の2つが提案されていましたが、「ふじ」に軍配が上がり第一候補として農林大臣に諮問されることになり、新品種「ふじ」が昭和37年に誕生しました。

#### ●生産拡大から発展へ

登録後当初は着色が劣ると評価されましたが、昭和43年の「国光」大暴落がきっかけになり、急激に「ふじ」への品種更新が進み、昭和47年時点では長野県ではリンゴ栽培面積のトップになります。その後も着色系の導入等で拡大が進み、平成8年には全国リンゴ面積の48.7%（長野県56.4%）を占めるに至りました。



「ふじ」の高接ぎ樹（果樹試）

昭和41年4月（54年前）に当時16年生の「旭」に高接ぎされた。場内最古参の樹。



「ふじ」の高密植栽培

担当者	小川 秀和	電話番号	026-246-2415
-----	-------	------	--------------

[試験場ニュースへ](#)